

## 論点整理に係る関連資料(抜粋)

---



# 本市における教育・人材育成に係る問題意識

・本市における教育・人材育成に係る問題意識を共有するとともに、こうしたことを基に、どのような人材や教育が必要なのかについて方向性を導出するとともに、その具体化を図っていくこととする。

- 地方部という物理的な制約も相まって、活用できる教育・人材育成の資源は限定的であり、これまでは、献身的な教員をはじめとした関係者の不断の努力に大きく依存してきたことは否めない。
- このため、各地の教育現場にもみられるように、年功序列や経験主義に依るところも少なくなく、社会の変化に適切に対応していくことは容易ではなかった。
- 一方で、本市がこれまで蓄積してきた固有の地域資源が豊富にあるにもかかわらず、そうした資源を社会の変化に織り込みながら教育・人材育成に十分に活用できているとは必ずしも言えない現状にある。
- 地方部においては、教育・人材育成がまちづくりに直結するものであり、本市も例外ではなく、如何に社会や地域に開かれた教育・人材育成を行っていくかが重要な課題である。
- 当事者である子供目線に立ち、デジタルを活用しつつ、域内外の多様な資源を取り込むなど、既存の制度や前例主義にとらわれることなく、新たな教育・人材育成の姿とその実現のための具体策を、我が国の大部分を占める地方部たる本市から描いていくことが不可欠である。



# 本市が目指す教育・人材育成像の方向性

- 本市が目指す教育・人材育成像の方向性を、丹後ちりめんに準え、経糸と緯糸で捉え直し、当該方向性を地域全体で共有し、本市の教育・人材育成の経糸と緯糸を紡いでいくこととする。

緯糸の  
考え方

## 【変遷するもの】

グローバル化といった社会の大きな趨勢と、それに対応する教育・人材育成の新たな施策を指す。

経糸の  
考え方

## 【不易的なもの】

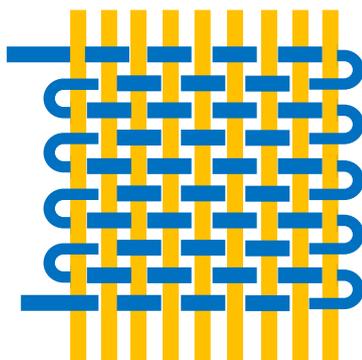
社会や教育現場の昨今の変化の中にあっても大きく変わらない地域固有の価値を指す。

## ■ 人材像

世界を舞台に活躍することができるのと  
ともに、地域に還ったり、域外から地  
域に関わったりすることも通じて、未  
来を創っていく人材

- ✓ 丹後人や日本人として世界で渡り合うことができる人材
- ✓ 地域の良さを域外に発信することができる人材

- ✓ 地域の良さを理解し、地域に戻ってくる  
ことができる人材
- ✓ 地域の外にいても、持続的に地域にか  
かわることができる人材



## ■ 教育像

テクノロジーの活用によりSociety5.0に  
対応しつつ、京丹後市固有の伝統・  
文化・暮らし等の地域資源を通じて更  
なる付加価値を共創していく教育

- ✓ GIGAスクール構想を基盤としつつ、  
STEAM教育や英語教育、アントレプレ  
ナーシップ教育等のSociety5.0に対応し  
た教育

- ✓ 地域固有の伝統・文化・暮らしや特筆す  
べき技術等のこれまで地域で培われてき  
た地域資源を活用した教育



# 本市の目指す人材像に求められる資質能力の例(イメージ)

- ・ これからの時代に求められる資質能力の一部※を船に喩え、各資質能力の位置づけを可視化している。
- ・ その上で、社会を生き抜く力の育成に向けて、保幼小中一貫教育を核とした魅力的な事業・教育活動、地域に開かれた学校、安全・安心な学校づくりを進めてきており、高等学校教育に繋げて、資質能力を育てていくことが重要である。

※必要な資質能力の全体像を示したものではない点に留意。

## 社会を生き抜く力

相互理解  
共感性

コミュニケーション  
協働性

創造性  
柔軟性

英語運用能力

## 丹後学・Kyotango Sea Labo

- 郷土への愛着と誇り
- 自らの生き方・あり方の思考
- 人間中心の発想法(デザイン思考)
- 自らの創造性に対する自信向上 etc.

- キャリアに対する意識変革
- 社会変化に対する受容力 etc.

### 【アントレプレナーシップ教育】

- 諸領域を横断・統合しながら問題を発見・解決していく力
- 科学的・客観的な根拠に基づいて論理的に考え、表現する力 etc.

### 【STEAM教育】

- 目的意識をもった行動力
- 情報を適切に収集・分析・活用する力 etc.

### 【探究的な学び】

## 言語能力

母国語 & 外国語(英語)  
語彙力・理解力・表現力・多文化理解 etc.

## 非認知能力

自己肯定感・積極性・粘り強さ・向上心・挑戦心・リーダーシップ etc.

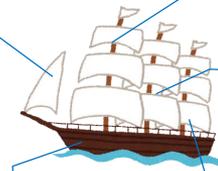
船体の行先の決定

【フォアマスト】  
船体の前進力の創出

【メインマスト】  
船体の安定性の確保

【ミズンマスト】  
船体の舵取り等

船体の基盤



- 令和の日本型学校教育が目指す学びとして、「個別最適な学び」と「協働的な学び」※を一体的に充実していくこととされており、こうしたことを前提としながら、本市の目指す人材像の育成に必要な資質能力を育んでいくことが重要である。

## 個別最適な学び

### 【指導の個別化】

全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

### 【学習の個性化】

言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

## 協働的な学び

探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

※出典：文部科学省

- このため、準備会において設定した検討事項について、既存の枠組みにとらわれることなく、当事者である子供の視点や本市独自の地域性の観点を踏まえた議論を行う。

### < 検討事項 >

- ✓ 地域資源を織り込んだSociety5.0に対応する教育内容
- ✓ 教育効果と地域の付加価値を最大化するシームレスな制度の在り方
  - デジタルを活用することにより、ヒト・モノ・カネ・情報・コミュニティ等の教育資源の制約を乗り越えるための制度の在り方（遠隔教育等）
  - これからの社会に求められる人材育成に向けて、就学前教育段階から中等教育段階まで切れ目ない教育を行うための制度の在り方（中高の連携の在り方等）
- ✓ 地域・産業界と連携した教育・人材育成の在り方



中央教育審議会「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する特別部会(第4回)」  
堀田龍也部会長代理(東北大学大学院情報科学研究科教授、東京学芸大学大学院教育学研究科教授)の発言抜粋

- 我が国の学校教育の制度というのは非常に堅牢で、国とか任命権者とか設置者とかいろいろなところが、いろいろなことをきちんと安定的にやる仕組み、がっちりした仕組みがあるわけで、そのことと現在の社会の流動性、子供たちの多様性みたいなことが、いろいろなコンフリクトを起こしているんだと思います。
- これから、社会がもっと安定していくかという、ちょっと僕は微妙な気がしていて、そう考えると、ある意味、学校教育のこの堅牢な仕組みをどれだけ柔軟にできるかが大事なのかなと。そのこととデジタルは非常に大きく関係していると思います。例えば、教育内容を考えたときに、先ほどの神野委員の話で分かるように、ChatGPTのようなものが出てきたら、そのツールをどう使うかという話のレベルではなくて、そもそも今までの教育内容がこのままで良いのかというレベルの議論が必要になると思います。
- またさらに、この二つのワーキングの報告とCOCOLOプランにも書いてありますけれども、ICTとかオンライン、いっぱい書いてあって、一方で現実には、先生のパソコンは持ち出しはいけないとか、あとは、これはインターネットにアクセスできないとか、やたら制約が入っていて、インターネットとかが、ICTが入っているんだけれども、実は先生たちは働き方はあまり楽になっていないという現実があります。
- こういういろいろな制約、これをどうするかというのは、教師の働き方にとって大きな問題だと思いますし、例えば、先ほど冨塚教育長がおっしゃいましたが、情報モラルも、そもそも情報活用能力の一部なので、適切な使い方、判断力、態度みたいなことが情報モラルという言葉の概念ですけども、それを何かこう、携帯を使わせないみたいな禁止教育に使ってきた、そういうふうな制約として使ってきたという歴史があって、今ちょっといびつな形になっているんだと思います。そういう意味では、これからの学校の在り方を、我が国の良さとしての堅牢さをある程度残しつつも柔軟にして、それぞれの持ち場で判断できるような、様々なことを連携できるようなやり方を具体的にどうするかということを考えたときに、次の学習指導要領とか、それに向かっていく指導体制とか、教員養成の在り方とか、いろいろなところに大きなメスを入れるということが必要になるのではないかなと思います。



- ・ 本会議においては、本市が目指す教育・人材育成像の大きな方向性に沿って、具体的に何が必要で何を行うのかということ意識して議論を進める。
- ・ その際、当事者である子供の視点や本市独自の地域性の観点を常に踏まえるものとし、「京丹後市だからできる教育・人材育成」のための具体的な施策を検討する。

## 1. 地域資源を織り込んだSociety5.0に対応する教育内容

- ・ STEAM教育やアントレプレナーシップ教育、グローバル人材育成、デジタル人材育成等の教育課程における体系的な再構築
- ・ 上記のSociety5.0に対応する教育と丹後学等の地域に根差した教育を融合するための具体的な方策

## 2. 教育効果と地域の付加価値を最大化するシームレスな制度の在り方

- ・ デジタルを活用することにより、ヒト・モノ・カネ・情報・コミュニティ等の教育資源の制約を乗り越えるための制度の在り方【遠隔教育等】
- ・ これからの社会に求められる人材育成に向けて、就学前教育段階から中等教育段階まで切れ目ない教育を行うための制度の在り方【中高の連携の在り方等】

## 3. 地域・産業界と連携した教育・人材育成の在り方

- ・ 上記1. 及び2. の実現に向け、地元住民をはじめとした域内外の企業や教育関係者等、地域全体を包含するような複層的・重層的なネットワーク構築の在り方【産官学コンソーシアムの形成等】

# 教育内容に係る主な論点

## 1. Society5.0に対応した教育内容

### 主なご意見

- 緯系の「地域の良さを域外に発信」や「STEAM教育、アントレプレナーシップ教育」を京丹後市の経系「地域の良さの理解」「地域資源の活用」によって、中身を組立てて京丹後市ならではの方向性を見出すのがよい。
- GIGAスクール構想と学校との関係をどのようにしていくのかを考えていかなければならない。GIGAスクール構想により、先生の学習観、学力観、指導観変えていくことが重要である。
- 細かい指示を多くすると、シングルな作業はできるが指示を待つチームになる。しっかり自らが考え仲間同士助け合うようなチームをつくる教育を、GIGAスクールと文部科学省の「個別最適な学び」は目指している。これを京丹後で行い、京丹後で学べばイニシアチブを自分が持っている子どもたちが思えるような教育にしていきたい。
- シリコンバレーでイノベティブな活動をしている人々を調査・研究した成果をプログラム化した「Kyotango Sea Labo」のような教育課程外の取組を、公教育の中に入れていくことができればよいのではないか。
- グローバルな活動とは、新しいものを獲得していくような活動であり、対してローカルな活動は、地域に埋め込まれているものを改めて自覚し、それを大切にすることである。京丹後市出身者として、これらの活動をあわせ持てる人材がグローバルリーダーと言える。グローバルリーダーを駆動させるエンジンにあたるものがアントレプレナーシップであると認識している。
- 地理的な制約をオンラインとのハイブリッドや、ある種学びの市町間で遠隔地同士の連携ができないか。また、地域プレイヤーの持続可能な巻き込みという点では、善意に頼り続けるということだけではなく、例えばアントレプレナーシップで言えば年齢に関係なく、小学生から高齢者まで学べるオープンスクールのような場を作るのもおもしろいのではないか。
- 子供のころからデジタルに慣れ親しんだ若者が、新しい発想や機械を駆使して技能を継承して発展させることが、これからの製造現場の大きな目標であり、丹後地域だけでなく日本のモノづくりの課題だと感じている。

### 議論のポイント

- ✓ 学ぶワクワク感や教科の学びが自ら設定した課題を探究する上で生きるという実感が持てるような教育内容やその重点化をどのように考えるか。
- ✓ その上で、本市における教育課程の現状を踏まえつつ、STEAM教育の教育課程への取り込み、英語教育やデジタル教育、アントレプレナーシップ教育の在り方をどのように考えるか。

※主なご意見については、準備会におけるものを引用



# 教育内容に係る主な論点

## 2. 地域に根差した教育内容

### 主なご意見

- 学校や教育委員会だけでなく、地域の視点も入れることで、「この地域だからできる」という教育をつくっていく必要がある。
- 地域以外の「資源」は限定的であり、地域内の「資源」は豊富であるが十分活用できていないとなっているが、それらの「資源」が具体的に何をさして、なぜ限定的で、十分活用できていないのか。また、それをICTの活用で解決できるのかを検討するとよいのではないか。
- 縲系の「地域の良さを域外に発信」や「STEAM教育、アントレプレナーシップ教育」を京丹後市の経系「地域の良さの理解」「地域資源の活用」によって、中身を組立てて京丹後市ならではの方向性を見出すのがよい。【再掲】
- 丹後学は一定の成果はあるが、京丹後市をどうしたいのかということまでの学びをできているかは自問している。
- 都道府県立高校と地域、市町村の連携協働が必要である。教科の中の学びだけでなく、それと社会とのつながり、地域を窓にして社会や世界とつながっていく、学んだことを社会で実際に活かしてみる、いろいろな体験をしてもっと学ぶことが必要だと感じて教科の学びに帰ってくるといった循環を引き起こしていくことが重要である。
- 子供たちが地域を出ていくのは高校卒業時であり、それまでに地域のことを学んでもらうことが重要であるため、飯田市では市と高校が協定を結び、地元の方と一緒に地域人の育成のためのカリキュラムを作成した。
- 飯田市においても義務教育と高校教育には壁があったが、学校教育ではなく社会教育の観点からかわることにより、社会教育を通じて地域と学校を結び付けることで地域人材育成のカリキュラムを作成した。
- どのように地域の素材を学校現場に落とし込めるかが重要であり、地方から特色のある教育にしていきたい。
- 丹後ならではの自然にもっと触れて学べる環境や、オーケストラやジャズ、落語、映画等芸術鑑賞の機会を増やし、印象に残るような学業の時間があるとよい。

### 議論のポイント

- ✓ 本市が「有している資源」と「有していない資源」とは何か。丹後学にはそれらの資源をどのように活用していくべきか。
- ✓ 「1. Society5.0に対応した教育内容」と「2. 地域に根差した教育内容」を丹後学の中でどのように具体化を図っていくことができるか。また、そのための総合的な学習の時間の在り方をどのように考えるか。

※主なご意見については、準備会におけるものを引用



# 教育内容に係る主な論点

## 3. 義務教育から高校教育まで意識した教育の在り方

### 主なご意見

- 京丹後市で育つ子供がどのような学びでどのような知識やスキルを身につけ、そして目指す人材像は何なのか、という点を 就学前から高等教育まで一貫したものを教育者と地域が共有することが重要である。
- 高校が義務教育の取組の流れをしっかりと受け止めていくことが重要である。
- 都道府県立高校と地域、市町村の連携協働が必要である。教科の中の学びだけでなく、それと社会とのつながり、地域を窓にして社会や世界とつながっていく、学んだことを社会で実際に活かしてみる、いろいろな体験をしてもっと学ぶことが必要だと感じて教科の学びに帰ってくるといった循環を引き起こしていくことが重要である。【再掲】
- 京丹後市をベースに考えた場合、強み・活かせるソースとしては、京丹後市特有のちりめんなどの伝統的産業、あるいは観光等の復興が予測される産業に加え、高校の専門科が結構あるため、小中学生の巻き込み先として高校の専門科が連携しやすいのではないかと感じる。また、グローバルやデザイン思考等のプログラムで生まれているので、連携できることが多々あるのではないか。
- 子供たちが地域を出ていくのは高校卒業時であり、それまでに地域のことを学んでもらうことが重要であるため、飯田市では市と高校が協定を結び、地元の方と一緒に地域人の育成のためのカリキュラムを作成した。【再掲】
- 飯田市においても義務教育と高校教育には壁があったが、学校教育ではなく社会教育の観点からかかわることにより、社会教育を通じて地域と学校を結び付けることで地域人材育成のカリキュラムを作成した。【再掲】

### 議論のポイント

- ✓ 義務教育において身に着けた資質能力を一層伸ばしていくためには、設置者の異なる高校教育へどのようにつないでいくことが考えられるか。

※主なご意見については、準備会におけるものを引用



# 教育制度に係る主な論点

## 1. 教育内容の重点化

### 主なご意見

- 丹後学やSTEAMの取組がスポット的であり、学校教育に落とし込まれていない。どういう授業が必要なのかというのは、概念の方からカリキュラムに落とし込んでいく作業が必要になってくる。
- STEAM教育だけでカリキュラムを組めるわけではないというところがあるため、どのように重点化していくかということを考えることが重要である。
- 京丹後市の教育と人材育成に関わる問題意識について、具体的な取組例として、Kyotango Sea Laboがある。(中略)このプログラムを通じて京丹後市への興味、関心、思いが強くなっていることは興味深い。押し付けでなく、京丹後市に個別最適化したプログラム。課題としては、これを公教育を通じてインパクトを広めていくことができると考えている。
- Sea Laboは親が声をかけた子どもや英語が好きな生徒が中心になっていたイメージ。学級のトップだけに向けたものではない。プログラム最後のプレゼンを聞いて地域の子どもたちの潜在力の高さを感じた。デザイン思考を学ぶことで普段にはないことから学ぶことの楽しさを学び、破壊的イノベーションに繋がる新しい発想が生まれることを体験する場。英語は一部のみ導入して、デザイン思考に重点化した公教育にということも考えられる。
- Scratch(コーディングのコミュニティサイト)のユーザーが日本で3倍に増えている。小学校でのプログラミング教育にも取り組んでいくことが重要である。
- 中学校のSTEAMのMESHの取組を、小学校6年生から導入してはどうか。中学校ではさらに高度な内容、高校ではPythonを使って統計をやるという話もある。小中学校で興味関心が高ければ、高校で勉強したいという状態で高校につなげることができる。
- 高校は出口の部分が大きな課題・使命としてある。生徒の希望する進路をどのように保証していくか。そこからカリキュラムを考えていかなければならないと感じている。中学校までの学びについて高校の理解が不足していると改めて感じている。小中の系統的な学びをどのようにつないでいくかという発想をもっとしていく必要がある。探究の時間について改善の余地があると感じている。

### 議論のポイント

- ✓ 地域が考える「これからの社会を生きる子供たちに必要な教育」(教育内容の重点化)とは何か。
- ✓ これからの社会を見据えたとき、学校現場では現在の教育課程をどのように考えるか。教育内容の重点化を図るための学校現場における課題は何か。

※主なご意見については、これまでの会議におけるものから抜粋



# 教育制度に係る主な論点

## 2. デジタルを活用した教育展開の在り方

### 主なご意見

- 地域以外の「資源」は限定的であり、地域内の「資源」は豊富であるが十分活用できていないとなっているが、それらの「資源」が具体的に何をさして、なぜ限定的で、十分活用できていないのか。また、それをICTの活用で解決できるのかを検討するとよいのではないか。
- 地理的な制約をオンラインとのハイブリッドや、ある種学びの市町間で遠隔地同士の連携ができないか。
- 義務教育なので、全ての子どもたちに等しく機会を提供してあげたい。今回教えていただいた良い取組を、初めは遠隔で様子を見ているだけでも次回はオンサイトで参加するなど、面で展開できるように端末を上手に活用できればと思う。

### 議論のポイント

- ✓ これまで学校現場においてできなかったことが、デジタルの活用によりできるようになることは何か。デジタルを活用した教育の質の向上や機会均等の実現をどのように図るか。
- ✓ 本市のような地理的背景を前提とする中で、遠隔教育に係る特例制度の活用をどのように考えるか。
  - 臨時免許状や特別免許状の活用による外部人材を活用した発展的な授業の実施
  - 免許外教科担任を発令している場合において、免許を有する者による授業の実施

※主なご意見については、これまでの会議におけるものから抜粋



# 教育制度に係る主な論点

## 3. 中高の連携の在り方

### 主なご意見

- 学校の設置者ごとにまる抱えでやらないといけない一方で、シームレスのシームの部分ブレイクスルーするようなやり方の発案を期待する。
- 進路とともに教育内容をどのようにしていくかという点が重要である。制度でそれをどのようにつないでいけるかということを考えていく必要がある。
- 高校が義務教育の取組の流れをしっかりと受け止めていくことが重要である。
- 高校は出口の部分が大きな課題・使命としてある。生徒の希望する進路をどのように保証していくか。そこからカリキュラムを考えていかなければならないと感じている。中学校までの学びについて高校の理解が不足していると改めて感じている。小中の系統的な学びをどのようにつないでいくかという発想をもっとしていく必要がある。探究の時間について改善の余地があると感じている。【再掲】
- 高校の専門科が結構あるため、小中学生の巻き込み先として高校の専門科が連携しやすいのではないかと感じる。また、グローバルやデザイン思考等のプログラムで育まれているので、連携できることが多々あるのではないかと感じる。
- 中学校のSTEAMのMESHの取組を、小学校6年生から導入してはどうか。中学校ではさらに高度な内容、高校ではPythonを使って統計をやるという話もある。小中学校で興味関心が高ければ、高校で勉強したいという状態で高校につなげることができる。【再掲】
- 地域資源のことも知っているし、現場の声を聴き柔軟で機動的に取り組むやすいのは、都道府県よりも市町村である。都道府県と市町村のそれぞれの強みをハイブリッドで組み合わせた学校運営の形態というところをもっと柔軟に活用していくのはこれからの1つの在り方ではないか。都道府県立の学校で、運営の一部を市町村が運営していく、寮の部分を運営するとか、もしくは学校の運営自体を市町村がやるとか、新しい時代の学校の在り方を考えながら、議論することが大切である。

### 議論のポイント

- ✓ 地域における高等学校の位置づけはどのようなものか。どのような人材の育成を期待するか。
- ✓ 小中学校と高等学校の設置者が異なる中で、教育の連続性と一貫性を担保していくためには、具体的にどのような取組が求められるか。制度的な課題は何か。

※主なご意見については、これまでの会議におけるものから抜粋

